

## ■ 脇役も、また人生



宇治 公隆\*

芸能界でスターになる条件は？（答）華があること。いくら歌が上手くてもヒットしない歌手もいたり、それなりに演技がうまくても芽が出ない役者もいたり、世の中、なかなか難しい。若大将シリーズの加山雄三さん、太陽にほえろの石原裕次郎さんは、確かに独特の雰囲気をもっている。しかし、彼らの傍らには、田中邦衛さんや露口茂さんが陣取り、ドラマの厚みを増している。名脇役といわれた大滝秀治さんは、晩年、テレビで見かけただけで、何ともいえない味を出していた。

さて、標題について。先日、福井県に行く用事があった。月曜日の仕事なので前々日の夜に福井市に入り、翌日、コンクリート構造物を見て回ろうと下調べをした。なんと、授業でも紹介している十郷橋が隣の坂井市にあるではないか。日本最初のポストテンション方式の道路橋（支間7m）である。そして、今も立派に現役で活躍している。

日曜日はワクワクして電車に乗り、3つ先の丸岡駅（坂井市）へ。駅前のまっすぐな道を5分ほど歩くとそれらしいものが見えてくる。“まず確認”。十郷橋と書かれた銘板を確認し、目的達成。ただし、イマイチ達成感が無い。あっさり辿り着いたからか。否、そうでもない。何故か？欄干は近代的な物に衣替えし、道路の一構造物として周りの景色に溶け込んでいる。どうもそんな理由であろう。

しかし、橋のたもとから橋桁を覗き込むと、やっとなジーンとなってくる。建設当時の技術者たちの苦勞に想いを馳せ、暫し感慨に浸る。自分が生まれた時よりも前に造られ（昭和28年とのこと）、時代の流れとともに交通量が増加して道路形状も変わるなか、存在感を押し殺し、人の行き来に使われ続けている。60歳・還暦を迎えた十郷橋は今日も地道に車の荷重に耐えている。コンクリート関係者にとっては貴重な歴史的構

造物であるが、地元の人たちにとってはあたり前のように昔からそこにある1つの橋なのである。

ところで、建築分野では、昔から意匠設計に取り組む人たちが多く、作品と呼ばれる建物も多いが、近年、土木分野でも構造美を基としたランドマーク的な構造物を目にするようになった。橋に注目し、本工学会の学会賞〔作品賞〕を最近受賞したものについてホームページから拾ってみると、平成24年度：佐奈川橋、多賀城第一橋りょう、平成23年度：裏高尾橋、生名橋、ドバイメトロ高架橋、広野大橋。それぞれ個性のある構造物たちである。

一方、PCにとらわれず、歴史的構造物に目を向けると、まずは、日本橋の名前があげられよう。おそらく日本人の誰もが知っている知名度No.1の橋である。なお、私の両親の世代における代表的ラジオ連続ドラマ（その後映画化）「君の名は」の数寄屋橋もよく聞く名前である（ただし、昭和33年に外濠の埋立てにより橋は取り壊され、地名としてののみ残っていることを今回勉強した。橋の名前の由来を調べるのも楽しい）。

所在地の地名を頂戴した橋やトンネルが多いなか、数字の番号が付けられた橋もある。私の地元でいうと、鶴間1号橋、上和田1号橋、……。いささか単純なネーミングのようにも思ってしまうが、名前はどうか、発注者、設計者、施工者、皆がそれぞれの橋に対して熱い思いをもって計画、設計、施工したはずである。車や列車を安全に通行させ、地域住民に便利で快適な生活環境を提供している。有名だろうが無名だろうが、彼らは地道に、そして確実に自分に課せられた役割を果たしている。

人間も構造物も同じで、それぞれに個性があり、役割がある。渋い役者、味のある脇役に徹することも、また素晴らしい人生である。

\* Kimitaka Uji：首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 都市基盤環境学域 教授  
本工学会 常務理事